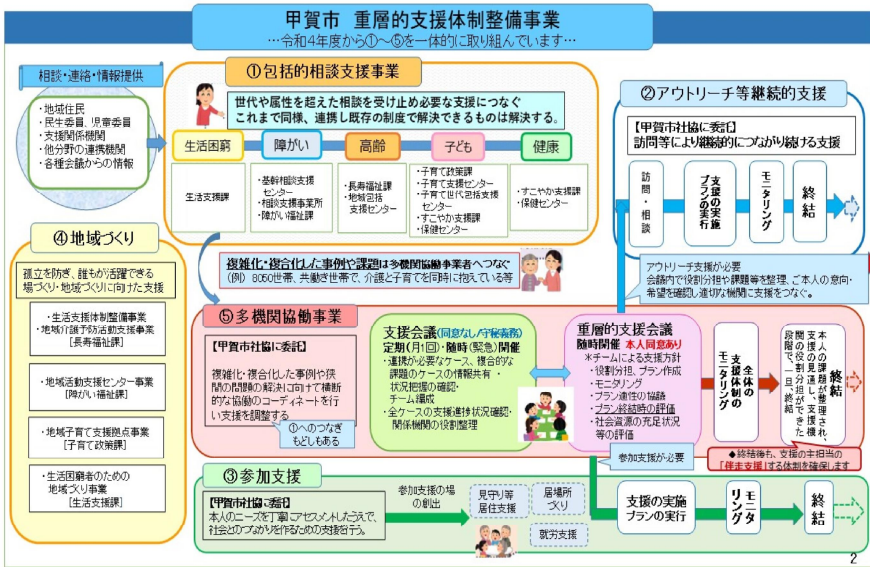


誰一人取り残さないまちづくり

一人の困りごとを地域の困りごとと捉え、甲賀市のしくみ(政策)にまで押し上げることで。

地域共生社会とは、制度や分野ごとに「サポートする側」「サポートされる側」という関係を超えて、人と人、人と資源がつながることで、住民一人ひとりの暮らしや生きがい、地域をみんなでつくっていく社会です。



少子高齢化による担い手の不足、血縁、地縁、社縁といったつながりの希薄化、価値観の多様化によって、社会的孤立関係性の貧困に陥りやすくなっています。甲賀市では、制度やサービスの隙間にある一人ひとりの困りごとの解決に向けて、みんなで考え、人と人、人と地域がつながるしくみづくりを進めています。

2022 R4の取り組み、2023 R5の展開へ

重層的支援体制スタート

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

支援会議で連携強化

一人の困りごとを検討する場である支援会議では、事業を受託している社会福祉協議会職員を中心に所属・分野を超え議論します。誰一人取り残さないまちづくりは、一人の生きづらさを放置しないことから始めていくことを意識しました。

これは、支援者を孤立させずに、みんなで取り組むことにつながります。

令和4年度は、22ケースに対して、33回の検討会を行い、甲賀市役所内18部署、外部関係機関は24機関が参加しました。

「オール甲賀」で！ 事業ありきでない

「オール甲賀」とは市民、地域、事業者、関係団体、行政などさまざまな分野や立場の皆さまの協力を得て、それぞれの力を最大限に引き出し、行政は応援することです。

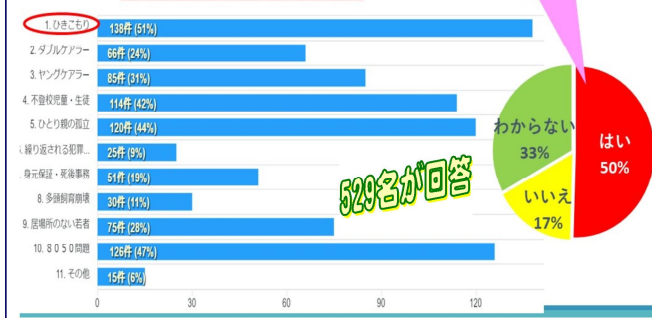
それには、市内に既にある地域のつながりや支え合う関係性を理解し、地域住民の主体性を尊重し、行政から必要な範囲で活動を応援する姿勢で臨みます。

地域住民や関係機関と対話を繰り返して「あつたらいいな」「こんな町に住みたい」といった地域住民の興味・関心から始まる活動です。

地域の困りごとへの関心は半数 関心事はひきこもり問題がトップ

Q 社会的孤立につながる地域の困りごとに興味・関心がありますか？

・内容 ひきこもり 138件



「地域共生社会の実現に向けた」住民アンケートで、回答者のうち2割が「身近に社会的に孤立している人を知っている」と解答。地域課題の「ひきこもり」問題に関心を寄せておられます。令和5年度は、本格的に着手していきます。

つながる場つくり 参加支援

社会的孤立を防ぐには、一人ひとりが地域社会との関わり方を自分で選び、役割りを見出せるよう多様な接点を用意していくことが大切です。

「参加支援」は、新しくつくるのではなく、人と人、人と資源をつなぐ場(プラットフォーム)をつくることです。次号から素敵な活動を紹介していきます。お楽しみに！

チーム 地域共生社会推進課



よろしくです。



うまく行きすぎた重層物語 1

これを読んだら
重層支援のキー
ワードが早わかりです。

甲賀市の市営住宅で暮らす家族の物語です。まずは家族の紹介です。

【登場人物】

- ・ **正子(曾祖母)** … 80歳。足腰はしっかりしていますが、最近になって物忘れがでてきました。
- ・ **昭一(祖父)** … 50歳。人間関係がうまくいかず仕事が長く続きません。現在は無職です。
- ・ **成実(母)** … 28歳。中学卒業後に家出し、最近、子供を連れて実家に戻ってきました。
- ・ **令也(子)** … 11歳。小学校6年生。5年生から不登校状態で、誰とも会いたがりません。

昭一の勤め先がなかなか見つからないことに加えて、成実は新しくできた彼氏に夢中になり、アルバイトを休んで好き勝手な生活をしています。正子の年金だけでは、一家の生活が立ち行かなくなり、たまたま正子と昭一は市役所に出向いて「生活費に困っている」と相談しました。

市役所の窓口(生活支援課) では、昭一の就労支援の手続きを説明し、安定するまでの生活保障として、地域にある食糧支援ボランティアを紹介することを伝えました。

帰り際になって、正子が、成実がろくに子育てもせず夜な夜な遊びまわっていることや、令也が一年以上も学校を休んでいること、そして、自分の物忘れも気になると話しました。

生活支援課の職員は、相談者の属性や世代、相談内容に関わらず、この相談をとにかく受け止めるようにしました。

包括的相談支援事業

正子らが帰ったあと、生活支援課の職員は、物忘れについては地域包括支援センターにつながる段取りをしました。しかし、成実と令也の件については、何から手をつけてよいか分からず課内で話し合いました。そして、相談内容が複雑で様々な課題が複合されているため、多機関協働事業者である甲賀市社会福祉協議会に相談することになりました。

多機関協働事業

相談を受けた社協職員は、家族それぞれが違った課題を抱えており、家族全体の課題を把握して、関係者で共有することが大切ではないかと思いました。また、成実と令也については、本人から直接に相談を受けてないこともあり、参加者に対して守秘義務が設けられ、必要な情報共有を行うことのできる会議で検討することになりました。

支援会議

後日、開催された支援会議では、福祉分野を超え、家族を知る市営住宅の担当者や地域の民生委員なども参加しました。話し合いの中で、自らの居場所を求めるように遊び回る成実や、学校に長期間登校できていない令也に対して、必要な支援が届いておらず、なおかつ本人ら

が「あまり人に会いたくない」と言っていることが分かりました。そのため、成実と令也の信頼関係の構築に力点を置いた支援を開始することが決まりました。

アウトリーチ等を通じた継続的支援事業

社協職員は食糧支援ボランティアと一緒に家庭訪問し、徐々に令也や成実と言葉を交わす場面もできました。食料ボランティアと社協職員が交代で食料を届けながら、原因追究や課題解決に急ぐことなく、とにかく孤立させないように、つながり続けようという訪問を重ねました。

伴走支援

時間をかけて、令也は社協職員とボランティアに心を開くようになり、成実と話す機会がほとんどなく寂しい思いをしていることや、幼い頃に父親から体罰を受けていたことなどを話すようになりました。また、令也はゲームの話をしているときに、とりわけ良い表情を見せることが分かってきました。

しばらく経った頃、成実が付き合っている彼氏との仲がうまくいかず、朝から飲酒するなど自暴自棄に近い生活を送るようになり、それをよく思わない昭一との間で口論となるが増えました。成実がつぶやくように「疲れた」と言ったことを、ボランティアはとても気にしていました。

良くも悪くも家族の暮らしに変化が見られ、成実と令也の口から困りごとや聞いた(本人同意)ことから、市の子ども部門や教育委員会、政策部門、建設部門、ボランティアなど多様な関係者が集まり会議を開催することになりました。

(5)月号に続きます。 文責 中井浩喜

